

津波避難は…

高台

# 「命の矢印」シール 貼ってください

## 四日市・北星高生ら 南海トラフに備え各戸配布

南海トラフ地震による津波に地域ぐるみで備えようと、四日市市にある定時制・通信制併設校の県立北星高校の生徒が、近隣住民宅を二軒ずつ訪問して防災を呼びかける取り組みを始めた。活動を「命の矢印」と銘打ち、高台の方向を示す矢印のシール「写真①」をハザードマップや防災備蓄品とともに配布。過去の災害では子どもが率先して避難したことでも多くの命が救われた事例もあり、地元や専門家は若い防災リーダーが地域を動かす方に期待している。（片山さゆみ）



住民に高台を示す「命の矢印」シールを手渡す生徒ら＝四日市市茂福で

「命の矢印」を作ったので、玄関などの目に付く場所に貼ってください」。

十六日の放課後、同校ボラティア同好会の五人が学校近くの住民宅を訪問し、矢印の中に「高台」と書かれた手のひらサイズのシールを渡した。受け取った住民女性には「生徒たちから事前に呼びかけてもらうのは心強い」と感謝した。

同校がある富田地区は市沿岸部に位置し、ほとんどが津波浸水想定区域。学校は指定避難所になっているが、市が避難を推奨する「津波避難目標ライン」よりは海側にある。より安全

な高台の方向を日ごろから意識してもらうため、矢印シールを作った。

同校は市外から通う生徒も多い。夜間部の授業は午後八時五十分までで日曜も通信制のスクーリングがあり、生徒が学校にいる時間は長い。校内や登下校中に地震が起きても生徒が自分で判断して避難したり、住民に避難を呼びかけたりできるような住民と協力して防災学習に力を入れてきた。

五月には、学校から約一・三キロ離れた高台まで住民と生徒が一緒に逃げる合同避難訓練を初めて開催。防災教育を担当する坂田広峰教諭（左）は「生徒が率先避難者になってほしい」と期待する。

坂田教諭は二〇一一年の

紀伊半島豪雨の際、勤務していた熊野市の木本高校で被災。校舎内は浸水し、復旧活動に関わった経験から、防災教育に力を入れるように、「生徒には普段から、足が不自由な人や高齢者を支援して一緒に避難するんだ、という意識を育ててもらいたい」と話す。

「自分の子どもや孫の世代の生徒から声をかけてもらえる」とインパクトがある」と、地元の北村町第五自治会の伊藤孝行自治会長（左）は歓迎。富田地区連合自主防災隊の渡部悟隊長（左）も「隣近所との交流が希薄になっており、学校が若い力を生かして地域に入り込んでくれるのはありがたい」と感謝する。

同好会の生徒は現在十一人で、月二回程度のペースで活動していくという。同好会の会長、矢橋佳意さん（右）は「地域の人と話す機会は今までなかったのが、緊張した」と言うが、住民たちの反応に「災害時の行動を知ってもらうのは大事なので、続けていきたい」と意気込んでいる。

（今回の記事を再掲します）

### バイアス 若者が打破

三重大地域圏防災・減災研究センター・川口淳副センター長の話 大人は「今まで大きな災害はないから大丈夫」という経験則に縛られがち。若い人たちは、そのバイアスを打ち破ることができ、大人の意識が変わるきっかけになる。東日本大震災で被災した岩手県釜石市では、中学生が避難を呼びかけながら高台に逃げたことで多くの命が助けられ「釜石の奇跡」と呼ばれた。学校の活動として実施することで、「富田の奇跡」につながる取り組みとして期待できる。